

さあ、私が今あなたにしてほしいことを記そう。礼拝に集まった時には、各々、全ての
人にとって役立つものを準備しなさい。つまり、詩編を歌うこと、教えを説くこと、物語
を宣べ伝えること、祈りを導くこと、洞察力を養うことを、それぞれ備えて集まることに
しなさい。

——コリントの信徒への手紙（一） 14章26節

マルコが伝えた「良い知らせ」

——マルコ伝福音書 訳述——

川上直哉

神様の わが子と慈しみなさる 尊き方、
私たちを助ける人 イエスと呼ばれたキリストの、
その「良い知らせ」の そのものの物語。

それから6日、経ちました。旧約聖書の創世記の最初、神様が「光あれ」と
言って世界を創り始め、世界が完成するまでが「6日」でした。イエス様は、
誰であるのか。そのことを語るなかで、イエス様は全く新しい「光」を私たち
の中に投げ込んでくださいました。では、その完成を見る時、私たちは何を見
ることになるのか。そのことをお話ししましょう。

その時イエス様はペテロとヤコブとヨハネをお連れになって、高い山に登ら
れました。ただ、この三人だけ、お連れになりました。そして、高い山の上で、
変身しました。着ているものは、白く輝いていました。その白さは、この地上
のどんな技術を使ってもできないほどに、真っ白でした。そこにエリヤがモー
セと一緒に現れました。エリヤは「死なないで天に昇った人」、モーセは「死
んだ」と伝えられながらも「墓が見つからない」と聖書に記されている人

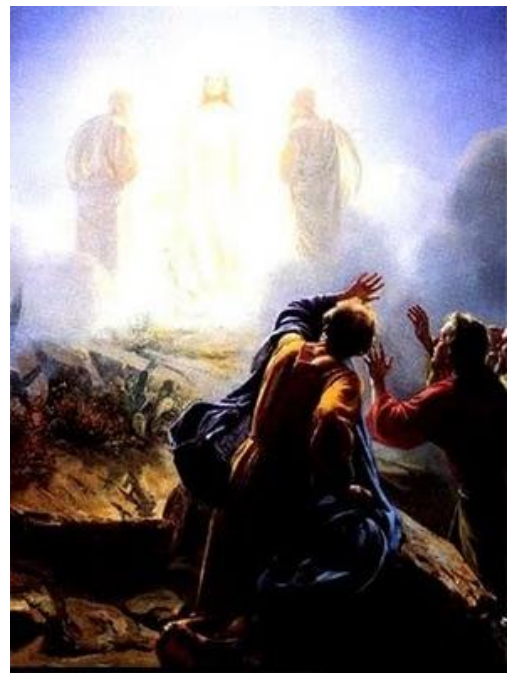
です。エリヤこそ「預言者」の代表、モーセは「神様の掟」の代表、ということです。つまり「預言者」が「神様の掟」を連れて、天からやってきたのでした。そして二人はイエス様と語り合ったのです。これが、イエス様が投げ込んでくださった「光」の完成する姿でした。

これを見て、ペテロが言いました。つまり、イエスさまが「光」を投げた時に退けられた「闇」のペテロが、こう言ったのです。「先生・・・すごいですね。さあ、旧約聖書の物語のように、私たちもやってみます。テントを作ります。先生のために一つ。モーセのために一つ。エリヤのために一つ。」ペテロはつまり、目の前に起こっている出来事に、どう応えていいのかわからなくなってしまったのでした。恐怖が三人を包んでいました。すると雲が三人を包みました。その雲の中から声が聞こえてきます。

「これこそ私の大切な
せがれ
倅だ。この倅に聞け。」



急に雲に視界を奪われ、そして「これこそ！」と声が聞こえたものですから、三人は周りを見回し目を凝らしました。でももう、誰もいないようでした。ただ、イエス様だけが、三人と一緒にいたのでした。



山から下りる時、イエス様は「私がよみがえる時まで、このことは決して口外しないように」と釘を刺されました。それで、三人はしばらくずっと、この出来事が頭から離れず、「よみがえるって、どういうことだ？」と、あれこれいぶん話し合っていました。でも、雲の中からの声は「この俵に聞け」と言っていたのです。それで、三人はイエス様に聞きました。「学者の方々が、旧約聖書を見ながら、こう言っていました。『まず、エリヤが来るはずだ』と。あれは、どういうことでしょうか？」イエス様は答えて言いました。「旧約聖書に登場する預言者『エリヤ』は、確かに、まずやって来て、すべてのものを復興させるのでしょうか。それでは、『人の子（私）』については、旧約聖書にどう書いてあったのでしょうか。ひどく苦勞し、権力者に見捨てられるのではなかったのでしょうか？——いいですか、実際、エリヤはやってきたのです。つまり『水に沈める儀式を行うヨハネ』です。そして、確かに聖書にある通り、あの『学者』と呼ばれる人たちは、やりたい放題にしていましたね。」

それからお弟子さんたちの所へ戻ってみますと、たくさんの方が集まっていました。その中で、「学者」と呼ばれる人たちがお弟子さんたちと盛んに議論をしていました。そこにいたたくさんの人々はイエス様を見て「おお」とどよめき、イエス様の所へ走ってきて口々に声をかけます。イエス様が事情を聞きますと、一人の男の人がこう言いました。「先生、私の息子を、先生の所にお連れしたのです。霊の仕業です。口が利けなくなっているのです。どこでも霊がとり憑くと、息子の体はバラバラになって、泡を吹き、歯をきしらせて、干

からびたようになってしまうのです。お弟子さんたちに相談しました。憑き物を落としてくださいとお願いしましたが、そのお力はないようでした。」イエス様は「学者」に責められて動揺するお弟子さんたちを眺めながら、ため息をつき、そしてこうおっしゃいます。「ああ。何とも、神様のことを信頼できないのか。いつまで、私はあなたたちと一緒にいられるのだろう。いつまで、我慢しなければならないのだろう。」イエス様は先ほど、「エリヤ」あるいは「水にしずめる儀式のヨハネ」といった人々に「学者」がひどいことをする、と、語っておられました。今まさに、そのことが起こっていたのです。神様を「父」と呼び、自分たちを「神様の子ども」と信じる人々は、難しい現実を前にして、面目を失い、責められる。それでも、それだからこそ、いよいよ神さまの「親心」を信じていてくれればいいのに・・・まだ、難しいのかな・・・そう落胆しながら、イエス様はこう言われます。「さあ、その子をここにお連れなさい。」その子が連れてこられました。イエス様がその子を見つめます。すると急に、霊はこの子の体をバラバラにしながらくっつけさせて（つまり「ひきつけを起こし」）、地面にその体を投げつけ（つまり「飛び上がって地面に倒れ込み」）、泡だらけにしてゴロゴロと転がす（つまり「口から泡を吹いて転げまわる」）のでした。イエス様は父親に聞きます。「この霊が憑りついて、どれくらいになるのですか？」。父親は答えます。「もう子どもの頃からずっとです。しょっちゅう、火の中に放り込んだり、水の中に放り込んだり・・・この霊は、息子を殺そうとしているのです。何か、していただけるものでしたら、お情けをおかけ下さい。助けてください！」するとイエス様はこうお答えになります。

「何か、と・・・そんなことを言うのですか。」

ペンタ・デュナータ・ビス・テュ・オン・テイ
神様を頼りに思う人には、無理なことなど何もないのです。」

すぐにこの父親は答えて言いました。「神様を頼りに思いますとも！・・・でも、不安なんです。助けてください！」イエス様が目を上げますと、どんどん人が集まってきます。ぐずぐずしている暇はない、とイエス様は、大きな声を上げ、穢^{けが}れた霊を叱りつけ、言いました。「口を閉ざし耳をふさぐ憑き物、この私が命じる。この子から落ちろ！二度と憑りつくな！」すると叫び声をあげ、その子を何度もひどく引き裂きながら、憑き物は落ちました。その子は死んだようになりました。人々は「この子は死んだ！」と言いました。イエス様はこ

の子の手を取りました。そして起こしたのです。この子は、起き上がりました。その後、イエス様が家に入って行かれたので、お弟子さんたちは自分たちだけでイエス様に聞きました。「私たちに憑き物が落とせなかったのは、どうしてでしょうか。」イエス様は答えて言いました。「この手の憑き物は、祈り以外のどんなことをしても、落ちるものではないのだよ。」

それから、そこを発って、イエス様とお弟子さんたちは、本拠地としていたガリラヤを通して進みました。つまり、イエス様にとっては活動の原点に戻り、そしてそこから新しい一步を踏み出そうということなのでしょう。でも、最初の時とは逆に、イエス様は大声を上げることもなく、誰にも知られないように、道を進みました。というのも、イエス様は道中、お弟子さんたちに『人の子』は人々に裏切られて当局に突き出されて死刑となり、そうして『人の子』は人々によって殺され、そして三日目に復活する」ということを教えていたのです。最初の旅とは違うものとなる。イエス様は、はっきりそう覚悟していたのでしょう。でも、お弟子さんたちは、イエス様の言っていることを理解しませんでした。なんだか不安になって、イエス様にお尋ねもしませんでした。それで、なんとなく「しん」とした旅が始まったのです。

そして、最初の行程と同じく、ローマの駐屯地として栄えた町カファルナウムに到着しました。家に入ると、イエス様はお弟子さんたちにお尋ねになりました。「道々、何をぶつぶつと話し合っていたのですか？」お弟子さんたちは黙ってしまいました。イエス様の話も理解せず、「分からない」と聞くこともしないで、お弟子さんたちは道々「自分たちの中で誰が一番偉いのか」について、話し合っていたのです。イエス様の世直し運動は、いよいよ成果を上げている。一度、ちょっとだけ、イエス様は挫折したけれど、戻ってこられた。いよいよ、自分たちの活躍する場面がやってきた。もう大丈夫。さあ・・・と、勢い付いた途端に、お弟子さんたちは、互いに足の引っ張り合いを始めていた、ということなのです。それを鋭く問われて、気まずいお弟子さんたち。イエス様は座って、お弟子さんたちのリーダーとして指名した 12 人（特別に「使徒」と呼ばれていました）を呼びました。そして、その 12 人にこう言って聞かせたのです。

「ローマが支配してこの方、役所でも軍隊でも、支配し威張り勝手にふるまう人のことを『プロトス（第一の者）』と呼んでいますね。それを見て、それに憧れ、自分もそうなりたいと思うのでしょうか。もしそう思うなら、その人は『一番最後の人』になるべきです。つまり『どんな人にも仕える奴隷』とならなければなりません。」

そして、呼んでもいないのに勝手にそこにきて一緒に座っていた子どもに声をかけ、そうそうたる「12使徒」の真ん中に招いて、抱き上げてから、イエス様は12人にこう言いました。

「この子のような、呼ばれてもいないのに入り込んでしまうような、そんな人をこそ、仲間に受け入れて行く。私の名前（イエス＝“聖書の神は救う”）を思い出して、そうする。そんな人が、私を受け入れる人なのです（あなたたちは、耳をふさいで私の言葉を受け入れなかったですね）。そして、私を受け入れる人は誰でも、実は私を受け入れているのではなく、私を遣わしている方を、つまり天の父・聖書の神様を、受け入れているのです。」するとヨハネが口をとがらせて、でも少し戸惑いながら、こう言いました。「先生、この間、先生のお名前（イエス＝“聖書の神は救う”）を使って、憑き物に苦しんでいる人を助けて、憑き物を落としている人を見ました。でも、その人は私たちに従わなかったのです。先生の直弟子『12使徒』の私たちですよ。こんな馬鹿にした話はないと思いましたから、私は、『そんなことはやめろ』と言って、やめさせたのです。」そんな時、イエス様はこう言ってお叱りになるのです。「なんで、やめさせたのですか。この子どものように、私たちが招いていないのに、私たちの働きに混ざってきた人でしょう。だいたい、私の名前を使って、私が得意としていること、人々が『奇跡だ』と言って驚くようなことを、その人はしていたのでしょから、その人は私のことを、その場で悪く言うこともないはずです。私たちのしていることに反対しない人は、つまり、私たちのしていることに賛成している——違いますか？あなたが渴いている時、『クリスチャンですね』と言って水をくれる人がいたら、その人は、私の名前を聞いてよいことをしてくれたのです。それがコップ一杯の水であったとしても、決して報われないということはありません——アメン！このことは、はっきりとここで言うておきます。この子どものように、勝手に私たちの仲間のようにならう

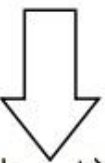
人も、いるでしょう。でも、そうした人も、私の名前（イエス）の意味（“聖書の神は救う”）を信じているのです。そんな人の邪魔をするような人がのさばるくらいなら、ロバが引いているあの石臼でもその邪魔する人の首に括りつけて、そのまま海の中へ沈めてしまった方がいい。いいですか、あなたのその手が、そうした人を邪魔するのであれば、そんな手は切って捨ててしまいなさい。両手が無事なまま「ゲヘナ」へ、つまり、旧約聖書のイザヤ書に書いてあるあの「劫火の海・蛆が無限に湧き、火がいつまでも消えない場所」へと放り捨てられるくらいなら、片手が無くなって「いのち」へ、つまり「たとえ死んでも生き活きとしていられるいのち」の中に入るほうが、ずっといい。あなたのその足が、そうした人を邪魔するのであれば、そんな足は切って捨ててしまいなさい。両足が無事なまま「ゲヘナ」へ、つまり、あの「劫火の海・蛆が無限に湧き、火がいつまでも消えない場所」へと放り捨てられるくらいなら、片足が無くなって「いのち」へ、つまり「たとえ死んでも生き活きとしていられるいのち」の中に入るほうが、ずっといい。あなたのその目が、そうした人を邪魔するのであれば、そんな目は投げ捨ててしまいなさい。両目が無事なまま「ゲヘナ」へ、つまり、あの「劫火の海・蛆が無限に湧き、火がいつまでも消えない場所」へと放り捨てられるくらいなら、片目が無くなって「神の国」に入るほうが、ずっといい。「ゲヘナの劫火」ということで言えば、全ての人がひとり一人、火であぶって塩漬けられる肉のようなものです。神様にささげる供え物の肉は、火で焼かれ、そして祭司たちに分けられるのですが、その時、塩漬けにされますね。実に、『塩』というものはいいもので、肉を美味しくするものです。でも、塩から塩気が無くなってしまったら、何によっても味付けができなくなります。私の言葉を守る人は、きっと、片手・片足・片目を失うような苦しみに遭うでしょう。でも、そこに神様の『塩』が振りかけられ、あなたたちは神様への最上の捧げものとなり、人々のよろこびの源となるのです。ですから、神様からの『塩』を失わないようにしなさい。『塩』とは、つまり、あなたたちの間の平和のことです。『あの人』との間に平和が保たれるように、心がけなさい。そのために、時には犠牲も覚悟して。でも、忘れてはいけません。どんな犠牲も、平和を保つために払うのです。犠牲の痛みの先には、あなたと『その人』との間に平和が残る。そうあるように、心がけていなさい。」

マルコ 9 : 40 = ルカ 9 : 50

「私たちに反対しない人 (οὐκ ἔστιν καθ' ἡμῶν) は、私たちの味方 (ὑπὲρ ἡμῶν) である。」
「あなたがたに逆らわない者 (οὐκ ἔστιν καθ' ὑμῶν) は、あなたがたの味方 (ὑπὲρ ὑμῶν) である。」

マタイ 12 : 30 = ルカ 11 : 23

「私の味方でない (μὴ ἂν μετ' ἐμοῦ) 者は、わたしに反対する者 (κατ' ἐμοῦ) である。」



クリスチャンに反対しない人は味方である・頼りになる。

キリストに賛成しない人は味方でない。一緒にやらない。